

都市に居住する子どもの居場所に関する研究

— 都市または都市近郊に住む中学生を対象として —



AK11007 天農 花子

Keywords

子ども 居場所 ナワバリ学
都市 住居 子ども部屋

1. はじめに

1.1 研究背景

建築計画学では、従来、実際の住居の調査から計画論的なデザインのヒントを探ってきた。一方、少子高齢化を迎えた日本社会では、都市での住まい方の新たな形や方法論が模索されている。戸建住宅や集合住宅の区別なく高密度に集まり、かつ地域社会とのかかわりで形作られる居住空間の新たなモデルを提示することが大きな課題となっている。本研究はこのような背景から、居住空間における子どもの領域に着目する。

日本において子ども部屋が普及し始めたのは、高度成長期である。当時から、勉強部屋として親が子どもに居室（子ども部屋）を与えることが一般的であった。現在もなお、住宅のプランには子ども部屋としての居室が組み込まれており、「子どもは子ども部屋で過ごす」ことが多くの家族に受け入れられていることがわかる。

しかし、既往の『都市における子どもの領域の実態に関する研究』（清水 2010）から、親が子どもに与えた領域（子ども部屋）と、子どもが作り出す領域は異なることがわかった。小学生年代の子どもは、与えられた領域内にとどまらず、居間などの家族の集まる領域に、自ら自分の領域を作り出すのである。学習、遊び、睡眠など日常生活に含まれる多くの行為やモノを、子ども部屋から家族の居るリビングへ持ち込んでいるということが、住居におけるモノと行為の調査から明らかになった。

1.2 研究目的

こうした研究の一環として、今年度は、思春期直前、あるいはその渦中にある中学生の領域が、リビングから居室へ移行していく過程や自身の領域をどのように作っていくかを究明する。そこで本研究では、都市または都市近郊に位置し、同質の生活状況にあると考えられる私立の中学校の生徒を対象として、アンケート調査を行う。現代の中学生の住居や居室に関する捉え方や使いこなし方を調査することで、住居における子ども室のあり方の実際を探ることができると考えている。具体的には、以下の目的を持って研究を進めてきた。

1) アンケート結果から、中学生の子どもが成長に伴い、共有空間から居室へと日常生活を行う場所が変化する過程で、どのような空間を組織するのかを明らかにする。

2) 回収した間取り図から、玄関・居間・子ども部屋の位置関係をタイプ分けし、間取りと子どもたちの行動との関係性を分析する。

3) 回収した子ども部屋の図から、中学生の居室にあるモノを抽出し分析を行う。

1.3 研究方法

本研究は、先述したように私立の中学生を対象として、住居や居室に関するアンケートを行い、それをもとに分析を行う。アンケートは選択式の設問31問と、住居と居室の間取りを描く2問、計33問からなる。

アンケートは、2014年8~10月に、私立大学付属K中学校と私立大学付属S中学校の生徒に協力してもらい、同中学校の1年生から3年生を対象者として行った。

対象校となる一つめの私立大学付属K中学校は、千葉県にあり、男女共学である。全生徒数は15学級569名（内女子174名）である。アンケート内容は選択式の設問31問とした。アンケート用紙は、ホームルームの時間帯に配布し、回答してもらった。アンケートを配布した人数は、全校生徒569名中1年生80名、2年生80名、3年生80名の計240名であり、そのうち回収できたのは、1年生74名（内女子22名）、2年生74名（内女子20名）、3年生73名（内女子25名）の計221名（内女子67名）であった。

二つめの対象校となる私立大学付属S中学校は、東京都23区内にあり、男子校である。全生徒数は12学級521名である。アンケート内容は、表面にK中学校と同じ設問の31問を配し、裏面に住居の間取りと自室の間取りを描いてもらう設問を設け、自宅に持ち帰り回答してもらった。なお表面は必須とし、裏面は自由回答とした。全校生徒521名に配布し、そのうち回収できたのは1年生74名、2年生35名、3年生は131名の計240名であった。よって本アンケートは1年生148名（内女子22名）、2年生109名（内女子20名）3年生204名（内女子25名）の合計461名に協力してもらったことになる。

2. 本研究の位置づけ

2.1 ナワバリ学

本研究では、子どものナワバリ意識について言及している『居場所としての住まい』（小林秀樹 2013）を参考にした。ナワバリとは、その場所を自分の場所だと思い、コントロールする空間のことである。中でも、住まいのナワバリ学とは、家族が住居の中でどのように自分の居場所をもっているか、あるいは、どんなナワバリ争いが起きているかを通して住居を考えることである。ナワバリを知ることで、居室の使い方だけでなく、子ども部屋でありながら母親のナワバリであった、というような、住んでいる家族の深層心理を知ることができる。本研究は、このような考え方を踏まえ、子ども部屋のしつらえは子ども自身が決めているか、掃除は誰がしているのか、といった中学生へのアンケート調査を通して、子どものナワバリ意識の変化を探りたいと考えている。

2.2 既往研究

(1) 居住空間とモノからみる「子ども」の現代的様態

この研究（清水 2013）は、東京都内の集合住宅に住む、小学生の子どもがいる家庭を対象とし、都市に居住する子どもの現代的なありようを明らかにすることを目的としている。ここでは、住居平面の実測と聞き取り調査、リビングの物品調査を行い、小学生年代の子どもが主体的に空間を組織するのは、リビングにおいてであることを明らかにした。子どもは行為やモノをリビングに持ち込むことで、新たな居住空間を自ら組織しているとされた。

(2) 住まいにおける子ども室の位置づけに関する研究

この研究（浦部 2013）は、大学生を対象とし、子ども室の捉え方や子どもの縄張り意識等を分析し、子ども室の位置づけを再確認することを目的としている。自身の幼少期に育った住まいや子ども部屋、生活習慣、将来の住まい方などについてのアンケートを行った。さらに自身が幼少期に過ごした住まいの間取り図を描いてもらっている。第1章では、地域差を中心とした分析を行っている。都市部と郊外といった二つの地域に焦点をあて、アンケート結果をもとに生活習慣の違い等を分析している。第2章では、子ども室の繋がり方の分析を行っている。間取り図から得た平面図・断面図から玄関・居間・子ども部屋のつながり方によっていくつかのタイプ分けを行い、クロス集計を用いて、行動や意識との関係を分析している。第3章では、縄張りや気配を中心とした分析と称し、自身の体験と将来住むであろう住居との関係があるのか、家族の気配のあるなしが子どもの居場所を作る上で関係があるのかといった分析を行っている。

本研究はこうした既往研究の延長上にあるとらえ、小学生年代ではリビングが子どもの居場所であるという

既往研究の結果を踏まえ、対象を中学生本人とし、選択式のアンケートや間取り図を描いてもらい分析を行う。

3. 年齢差を中心とした分析

ここでは、居間を中心に独自の空間を作っていた小学生年代の子どもが、中学生になり、どのように居場所を変化させているのか明らかにする。

3.1 住居内での生活

主に過ごす部屋やお気に入りの部屋など、生活の中心となる空間は、年齢があがるとともに「居間・食堂」から「自分の部屋」へと変化していた。ただ、親と会話をする部屋はどの学年でも9割を超える人が「居間・食堂」と回答していることから、居間が家族とのコミュニケーションの場として多くの子どもに認識されていることがわかる。子ども自身の衣類や着替えを置く部屋や普段寝る部屋は、年齢が上がるとともに「自分の部屋」と回答する人の割合が増えていて、普段誰と寝ているかという質問では、自分一人と回答する子どもが年齢が上がるとともに増えていた。一方、勉強をする部屋は、学年による変化はあまり見られず、約6割が「自分の部屋」、4割が「居間・食堂」と回答している。個人的行為ととれる友人を招くという行為に使われる部屋は、学年ごとの変化は目立たず、全体の4割近くが「居間・食堂」と回答し、5割前後が「自分の部屋」と回答している。

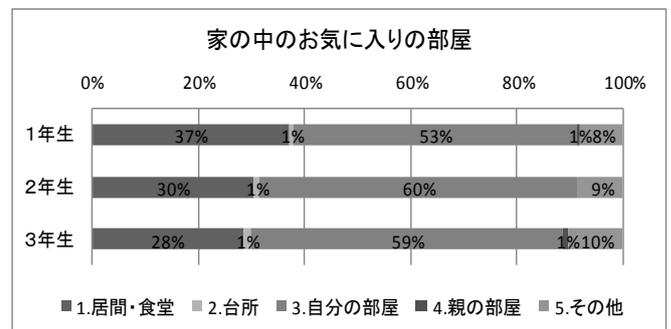


図 1 家の中のお気に入りの部屋

3.2 子ども部屋

どの学年でも全体の8割が、自分専用あるいは兄弟姉妹と共用の部屋を持っている。子ども部屋を与えられた時期では、1年生は「小学生低学年」がもっとも多く、3年生では「中学生」がもっとも多いことから、学年が下がるとともに自分の部屋を与えられた年齢が低いと言える。子ども部屋での行為は、学年が上がるとともに勉強以外にもゲームや読書、音楽などの趣味が増える。

全体の半数以上が自分の部屋への家族の出入りを気にしないと回答しているが、学年が上がるとともに、家族の出入りが困ると回答する人は増えている。在室時と不在時を比べてみると、在室時より不在時の方が気にならないと回答する人が多い。

3.3 ナワバリ意識

自分の部屋の掃除を自分でしている人の割合は、1年生では5割以下であったのに対し、3年生では6割を超えている。学年があがるとともに増えていることがわかる。一方、自分の部屋の家具やカーテンなどのしつらえを決めているのは、約半数が母親という結果になった。自分で決めていると回答した人の割合は、どの学年でも2割程度であり、若干学年が上がるとともに増えているが、学年による大きな差は見られない。

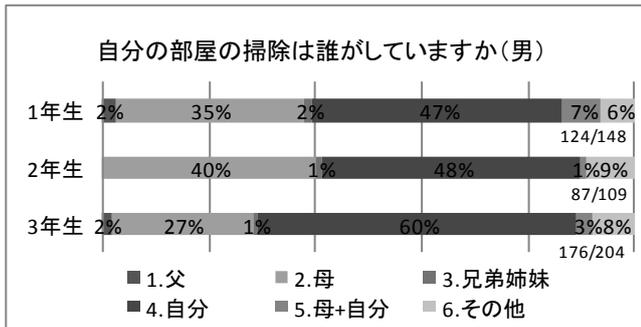


図 2 自分の部屋の掃除をしている人

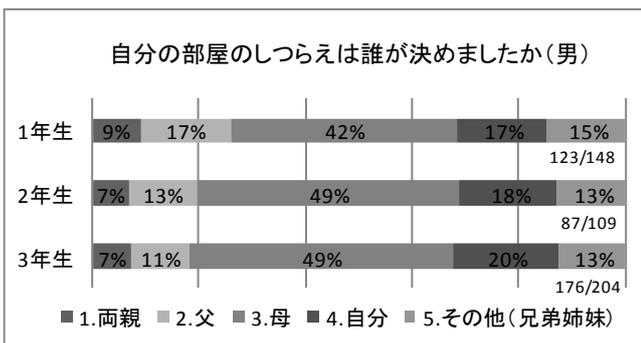


図 3 自分の部屋のしつらえを決めた人

4. 間取りと子どもの生活に関する分析

間取り図を、玄関・子ども部屋・居間の位置から以下の4つのタイプに分類し分析を行う。

A: 「玄関隣接廊下型」子ども部屋が玄関に隣接しており、居間と廊下でつながっている。

A': 「1階廊下型」子ども部屋が玄関と距離を置いて、居間と廊下でつながっている。

B: 「2階廊下型」子ども部屋が居間のない階にある。

C: 「居間隣接型」子ども部屋が居間とドアで結ばれている。

N: 子ども部屋なし。

表 1 タイプごとの回答者数

	A	A'	B	C	N	計
1年生	18	2	26	14	3	63
2年生	7	-	6	3	-	16
3年生	21	5	37	23	9	95

4.1 1年生の傾向

自分の部屋が2階にある子どもは、主に過ごす部屋とお気に入りの部屋を「自分の部屋」と回答する人の割合が高く、自分の部屋での一日あたりの在室時間も長い傾向がある。しかし2時間未満の在室時間を比較すると、どのタイプもほぼ変わらず5割程度であった。

玄関と居間の間に自分の部屋がある子どもは、自分の部屋での在室時間が1時間未満と回答する人の割合が高く、お気に入りの部屋を「居間」と回答する人の割合も高い。自分の部屋で過ごす理由には「落ち着く」が5割を占めている。

居間の隣りに自分の部屋がある子どもは、主に過ごす部屋を「居間」と回答する人の割合が他のタイプより高い。自分の部屋で過ごす理由は「落ち着く」と「好きなことができる」で7割を占めている。

4.2 3年生の傾向

玄関と居間の間に自分の部屋がある子どもは、主に過ごす部屋を「自分の部屋」と回答する人が他のタイプと比べて多く、自分の部屋での在室時間は長い傾向にある。自分の部屋で過ごす理由として「落ち着く」と「親から干渉されない」が多く見られた。

自分の部屋が2階にある子どもは、自分の部屋での在室時間が短く、お気に入りの部屋も「居間・食堂」と回答する人の割合が他のタイプと比べて高い。自分の部屋で過ごす理由は「落ち着く」に続き「好きなことができる」が挙げられていた。

居間の隣りに自分の部屋がある子どもは、主に過ごす部屋を「居間」と回答し、お気に入りの部屋を「自分の部屋」と回答する人の割合が高い。

5. 子ども部屋にあるモノ

本研究では、アンケートの一部として中学生の子どもたちに自分の部屋の間取り図を回答してもらった。具体的には、自分の部屋である子ども部屋の形やドアの位置、家具や収納の配置を描いてもらう。間取り図を回収できたのは、1年生59名、2年生15名、3年生87名ですべて男子生徒である。

表 2 部屋ごとの回答者数

	1人部屋	共用部屋	合計
1年生	47	12	59
2年生	15	-	15
3年生	71	16	87

中学生の子ども部屋にあるモノの調査では、9割以上の人が「机がある」と回答した。机の次に多いモノはベッドであり、回答者の7~8割が置いていると回答している。兄弟姉妹と共用の部屋を持つ人は、部屋に机を置くがベッドは置いていないと回答する人も半数ほど見られた。これらの傾向は学年による違いがあまり見られな

った。しかし学年が上がるとともに、部屋に置くモノの種類が増えていた。モノを収納する家具としてもっとも多いのは本棚であった。次にタンスが多く、この傾向も学年を問わず見られた。

6. 考察

これまでの分析から、中学生の子どもの生活空間や日常行為は、「居間・食堂」から「自分の部屋」へ、「家族と一緒に」から「自分一人」へと変化していることがわかる。自分の部屋への家族の出入りが困るという子どもは、学年が上がるとともに増えていることから、年齢に伴い自分の部屋を自分だけの領域と意識するようになると考えられる。

一部の子どもは、勉強などの自分の部屋でできることであっても、家族のいる空間で行うことを選択することから、生活の中心が居間・食堂から自分の部屋へと移行する過程にあると考えられる。友人を呼ぶなどの個人的な行為を、居間・食堂で行う子どももいることから、自分の領域である子ども部屋と家族との共有空間である居間・食堂の間に、パーソナル空間（自分の部屋）とパブリック空間（居間・食堂）の差異が、まだはっきりとついていないのではないかと考えられる。

7. 終わりに

本研究では、中学生年代の子どもの領域が、居間から自分の部屋へと移っていく過程や、家の中や子ども部屋での行為、ナワバリ意識を中心とした調査を行った。

既往研究によると、小学生年代の子どもがより主体的に空間を組織しようとするのは居間においてである。子ども部屋は好きな物や自分の持ち物を置くための空間であり、行為のともなう実生活はほとんど家族のいる居間で行われている。住宅内テリトリー概念図（図a）は、それを示している。

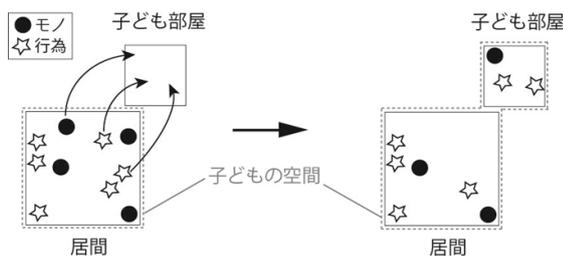


図 a 住宅内テリトリー概念図

本研究のまとめとして、年齢による子どもの居場所の変化を図に示す。幼少期の子どもは親の近くである共有空間の居間や食堂で多くの時間を過ごす。寝る場所は、親の部屋や家族の寝室など、家族と同じ部屋であることが多い（図b）。子ども部屋を与えられるとそこに机やベッドなど子ども専用のモノが持ち込まれていく。しかし自分の物置としての側面が強く、基本的には居間で過ごし、家族と一緒にの部屋で就寝する生活となる（図c）。中学生年代にさしかかると、家族と同じ部屋ではなく、

自分の部屋で就寝する子どもが増える。居間では家族との会話や食事が行われ、子どもが自分の友人と遊ぶ場としても利用されていることから、居間はパブリックとプライベートが混ざり合った認識がされていることがわかる（図d）。中学生高学年になると、子ども部屋を自分の部屋として意識し、コントロールするようになる。勉強や遊びなどを自分の部屋で行うとともに、部屋の掃除や、他人の出入りが気になるようになる。ただし居間では食事や家族との会話も引き続き行われ、居間は家族との共有空間であり、自分の部屋は一人になれる空間という意識に変化しつつあると考えられる（図e）。今後の変化としては、ナワバリ学を参考にすると、自分の部屋に居場所を持ち居間にも居場所ができてゆくと考えられる（図f）が、それは今後の課題とする。

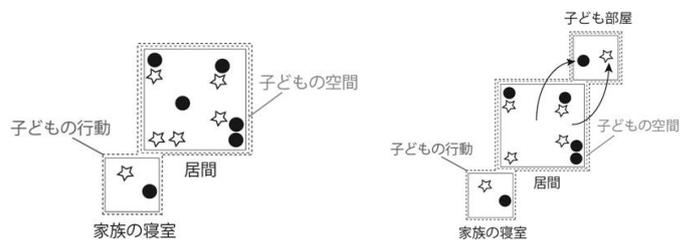


図 b 幼少期

図 c 小学生年代

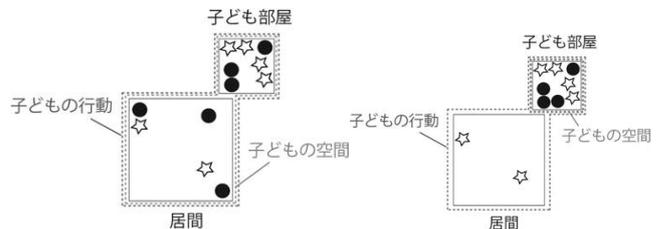


図 d 中学生年代①

図 e 中学生年代②

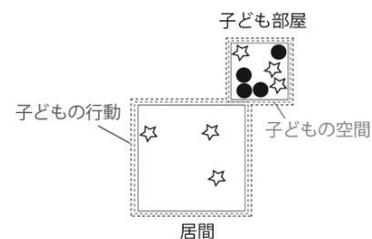


図 f 高校生以上

参考文献

- 1) 小林秀樹『居場所としての住まい ナワバリ学が解き明かす家族と住まいの深層』新曜社、2013年。
- 2) 清水郁郎（研究代表者）『居住空間とモノからみる「子ども」の現在的様態 「子ども」をめぐる空間と物質文化に関する研究』株式会社イケア・ジャパン共同研究成果報告、芝浦工業大学、2010年。
- 3) 浦部智義『住まいにおける子ども室の位置付けに関する研究』日本大学工学部建築学科、浦部研究室、2013年。